

# 折口信夫と水木直箭

## 「なら」民俗通信 255

西村 博美

▼歌人、水木直箭  
折口信夫は、奈良に帰っていた水木直箭(みずき・なおや)に、「も一度歌で出なほすつもりにおなりなされるやう」との手紙を出している。  
昭和九年、旅先の能登・七尾から、水木に宛てられた手紙の文面は、このようにある(用字をやや改めて引用する)。  
「必ず、「短歌研究」の( )正月号に出すこと。よいものを出すつもりになって下され。も一度歌で出直すつもりにおなりなされるやう。それだけで、わたしの肩の軽くなるような気がします」。折口信夫に、このような手紙を書かせた水木直箭とはどのような人であったのだろうか。

水木直箭は、明治二十年、奈良県生駒郡郡山町(現・大和郡山市)に、水木要太郎の二男として生まれている。郡山中学校(旧制)を卒業の後、大正四年、同窓の坂口保らと短歌会を結成し、「コモリ又(隠沼)」を創刊するが、「一、二年で水木の歌は、雑誌『国民文学』の半頁を占めるほどになった。  
また、当時出ていた『短歌雑誌』(大正七年)の歌

# 文化

「夕近みくぬぎ林に馬繫げ時雨の雨に馬の背濡れぬ」(「コモリ又」創刊号)と歌った水木は、ただこの一書に魅せられたのだという「口訳万葉集」(折口信夫著)の三巻本を持って、大正六年、国学院大学に折口の門を敲いた。「先生は三十一、私よりもちよつと十うえだつた」と水木は、自著『隨筆折口信夫』(角川書店)に書いている。

人新番付」の前頭上位に「水木征矢彦」の名が見える。「征矢彦」(せやひこ)は、水木の歌号。ちなみに、最高格の大関は、斎藤茂吉と若山牧水。釈道空(折口信夫)が前頭筆頭であることから見ても、中央の歌壇から遠く離れた水木への抜いが、いかに破格であったかが分かる。水木直箭、弱冠二十歳のころのことであった。  
▼「定本」と「全集」

「随筆」は、もともと書名のとおり、水木にとって先生である折口のことしか触れられてはいない(後半部の「柳田国男」とある項を除いて)。しかし、水木の素顔の一部を、わたしたちはまた別のところ(うかが)うことができる。水木は「喜

# 50年間敬い続けた先生

こんなうに、

だけのことかいな、と思うところはいくらです」。

さらに、また水木は『隨筆』(前掲書)でも、遠慮がちに語っている。

「柳田 先生はこんな私も大事にして、論文の抜き刷りや著作などをたびたび恵んでくださり、(略)柳田・折口両先生に、同じ世代に生まれあひ、親炙(しんしゃ)することの出来た私は、世にもしあわせなことだと思つた」。

わたしが今、手許にしている、「柳田国男先生著作目録」(昭和十月)と、「折口信夫先生著作年譜稿」(昭和二十九年)という水

水木直箭(冒須我波良) 第13号 1976年)から



寿記念特集」として編まれた「あすがはら七号帝塚山短期大学、昭和四十八年の、インタヴューでのように答えている。

「七十年生きて来て、お役に立った仕事というの、は、『定本柳田国男集』と『折口信夫全集』とのできりももになった、両先生の著作目録を長年かけて作って置いたこと、ただそれ

た「あすがはら七号帝塚山短期大学、昭和四十八年の、インタヴューでのように答えている。

「水木さんが、折口先生の著作物の蒐(しゅう)集として聞えていた」「折口先生の著作目録は、わたしはわたしで作っていた」「マニアという語は失礼だと思つたが、まさに折口マニアとしての水木さんでなくてはと思われ」。

こんなうに、

水木の著作『隨筆』の「跋(は)つて記しているのが、水木と同じく折口門下にあつた池田弥三郎である。池田は、「水木さんの、旧師折口信夫先生に対する敬愛の情が、みろり始めたのは、昭和二十九年に第一期の出版からのことだつたと

言えるだろう」とまで書き、「非礼とならなかつたか」と跋文を閉じている。

▼折口先生と「水木と前掲の『隨筆』にめづらしく水木は、折口への自身の思いを記している箇所がある。「五十数年の間、敬いつづけて来た先生」。教室で先生の名を語り続ける

木のまましく積年の労作といふものがなければ、柳田の『定本』も折口の『全集』も、あのような形で出てい

ただろうかと思わされる。しかし人は、時として別の言葉をもって人を測ろうとする。

「水木さんが、折口先生の著作物の蒐(しゅう)集として聞えていた」「折口先生の著作目録は、わたしはわたしで作っていた」「マニアという語は失礼だと思つたが、まさに折口マニアとしての水木さんでなくてはと思われ」。

こんなうに、

水木の兄、真弓は、松江高等学校(現・島根大学)教授で古川柳「柳多留」の研究者であった。水木は、兄真弓と二人で編著・校訂した『雨譚註川柳評句句白(有光書房)』という著作を残している。

先ほどの、古川柳。わたし(西村)なら「赤穂浪士に討ち入りされた吉良屋敷の人々のあわて驚(おどろ)き」と解くのだが、如何。(詩人、奈良民俗文化研究所研究員)

水木直箭(1897~1977年) 民俗学・国文学者。



福井県の「王の舞」見学の折り。左端が水木直箭、右端が折口信夫(『折口信夫の世界』1992年)から